

平成19・20年度南城市武芸洞遺跡発掘調査の概要

山崎 真治¹⁾ 藤田 祐樹¹⁾ 西秋 良宏²⁾

Excavations of the Bugeido Cave site in 2007 and 2008 seasons

Shinji YAMASAKI¹⁾, Masaki FUJITA¹⁾, Yoshihiro NISHIAKI²⁾.

Abstract

Okinawa Islands is widely covered with Ryukyu Limestone and Minatogawa hominid and other human fossils were discovered from some caves and fissures of Ryukyu Limestone. Okinawa Islands is one of the most important regions for the anthropological study about Late Pleistocene hominids in the East Asia. Okinawa Prefectural Museum and Art Museum and Okinawa Pleistocene Sites Excavation Group started to work for new human fossils in 2006. As a part of our study, we excavated the Bugeido Cave site in 2007 and 2008 seasons. The Results of our excavations are followings.

1. We found settlements and tombs of prehistoric age (Jomon and Yayoi parallel period) .
2. Tsumegata-mon potsherds (about 6,000 B. P.) were excavated from the layer 4 of Trench III. This is the first discovery of the Tsumegata-mon deposit in the south of Okinawa Isl.
3. The fire place and accumulations of burned soil and ashes of Middle Jomon (about 4,000 B. P.) were found from the layer 3 of Trench IV.
4. A pebble coffin of Final Jomon (about 3,000 B. P.) was excavated from Trench IV.
5. The almost complete human skeletal remain was found from the pebble coffin. This skeletal remain is presumed to be a man.
6. 12 shell beads were discovered around the left arm of the skeletal remain. This means that the buried man wore the bracelet of shell beads in his left arm.

1 はじめに

沖縄県には化石の保存に適した石灰岩が広く分布しており、港川人をはじめとする人類化石がいくつも発見されている。この地質的好条件を踏まえ、沖縄県立博物館・美術館では、新たな人類化石の発見をめざした調査研究を開始した。その一環として、平成19、20年度に南城市武芸洞の発掘調査を実施し、以下の成果を得た。

武芸洞が縄文時代前期から弥生並行時代にかけて、生活地や墓地として利用されていたことが明らかになった。

沖縄島南部では初となる爪形文土器の包含層(調査区・4層)を確認した。

面縄前庭式土器を伴う炉址1基および焼土面を確認した(調査区・3層)。

石棺墓1基(調査区・S X 2)を確認した。石棺墓内からは宇佐浜式~仲原式頃の土器片が検出されており、縄文時代晩期に属するものと推測される。

石棺墓からは、埋葬状態を保ったほぼ完全な男性の骨格1体分(第1号人骨)と、多数の遊離骨が検出された。

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.

2) 東京大学総合研究博物館 〒113-0033東京都文京区本郷7-3-1

University Museum, The University of Tokyo, Hongo 7-3-1, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033, Japan.

第1号人骨の左前腕に接して直径4mm程の貝珠12個が検出された。これらは着装されていたものと考えられる。

これらの成果は、さまざまな点で重要な意義をもつと考えられるため、以下に速報的に調査の概要を記載しておきたい。

2 武芸洞の概要と調査の方法

武芸洞は、沖縄県南城市玉城大字前川字照田嶽原1338番地に位置し、観光施設「おきなわワールド」に隣接するガイドツアーコース「ガンガラーの谷」内に含まれる。

洞穴は東西25m、南北30m程度の規模を有し、天井の高さは高いところで約4mをはかる(第1図)。東西に2カ所、天井部の陥没によって形成された開口部を有するため、洞内はおおむね明るく乾燥しているが、北側の袋状になったフロアの地表面は、天井からの水分の滴下によって常時ぬかるんでいる。洞床面のレベルは北側で高く、南に向かって低くなっており、かつては北から南に流水があったようである。しかし、関係者の話では、現在では降雨時にも洞内を水が流れることはないとのことであった。

洞床の標高は22～23m程度で、北側で高く、南側に向かって低くなる。また、東西の開口部付近では、洞外から流入した石灰岩礫や土壌が厚く堆積している様子が観察された。隣接する雄樋川の河床とは断崖によって隔てられており、比高差は6～7m程度である。

武芸洞の位置する雄樋川流域には、観光洞として知られる玉泉洞をはじめ、大小の鍾乳洞が多数分布し、洞穴遺跡も多い。武芸洞では、以前より石斧や磨石などが採集されており、先史時代の遺跡が存在する可能性が考えられていた。また、武芸洞は港川フィッシャー遺跡に近く、雄樋川流域の洞穴群の中でも規模が大きいこと、東西に二つの開口部を有し、明るく乾燥した洞穴であることから、先史時代の生活場所として好条件を備えた地点と思われた。

そこで、沖縄県立博物館・美術館では、国立科学博物館、東京大学、沖縄の地元研究者によって構成される沖縄更新世遺跡調査団(団長 馬場悠男 国立科学博物館人類研究部長)と共同で、平成19、20年

度に武芸洞の発掘調査を実施した。今回の発掘調査にあたり、南城市、南城市教育委員会、八重瀬町教育委員会、沖縄県立埋蔵文化財センター、株式会社南都、おきなわワールド、ガンガラーの谷をはじめとする関係機関には、多大な御支援、御協力を賜った。

現地での発掘調査には下記の方々にご参加いただいた。

赤嶺 敏、伊藤 圭、稲福 正、上間一平、大岡素平、大城逸朗、海部陽介、我喜屋千秋、川村玲未、金城 達、具志堅初子、久高将臣、栗田隆気、幸地美千子、近藤 恵、坂上和弘、新城啓八、諏訪 元、玉栄飛道、知念千代、土肥直美、名嘉政修、仲地政英、縄田雅重、馬場悠男、福元亜由美、細川 愛、松浦秀治、宮城清志、宮城光平、宮平真由美、山田浩久、山田雅幸(順不同・敬称略)

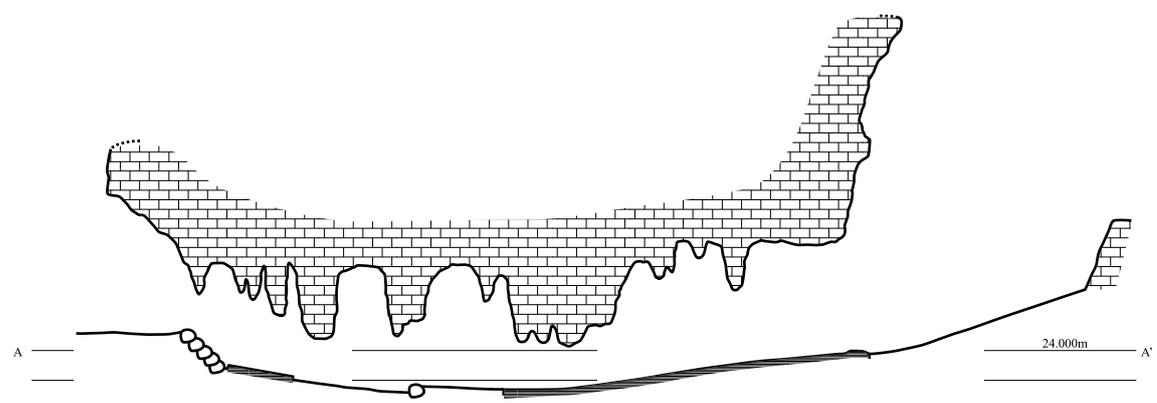
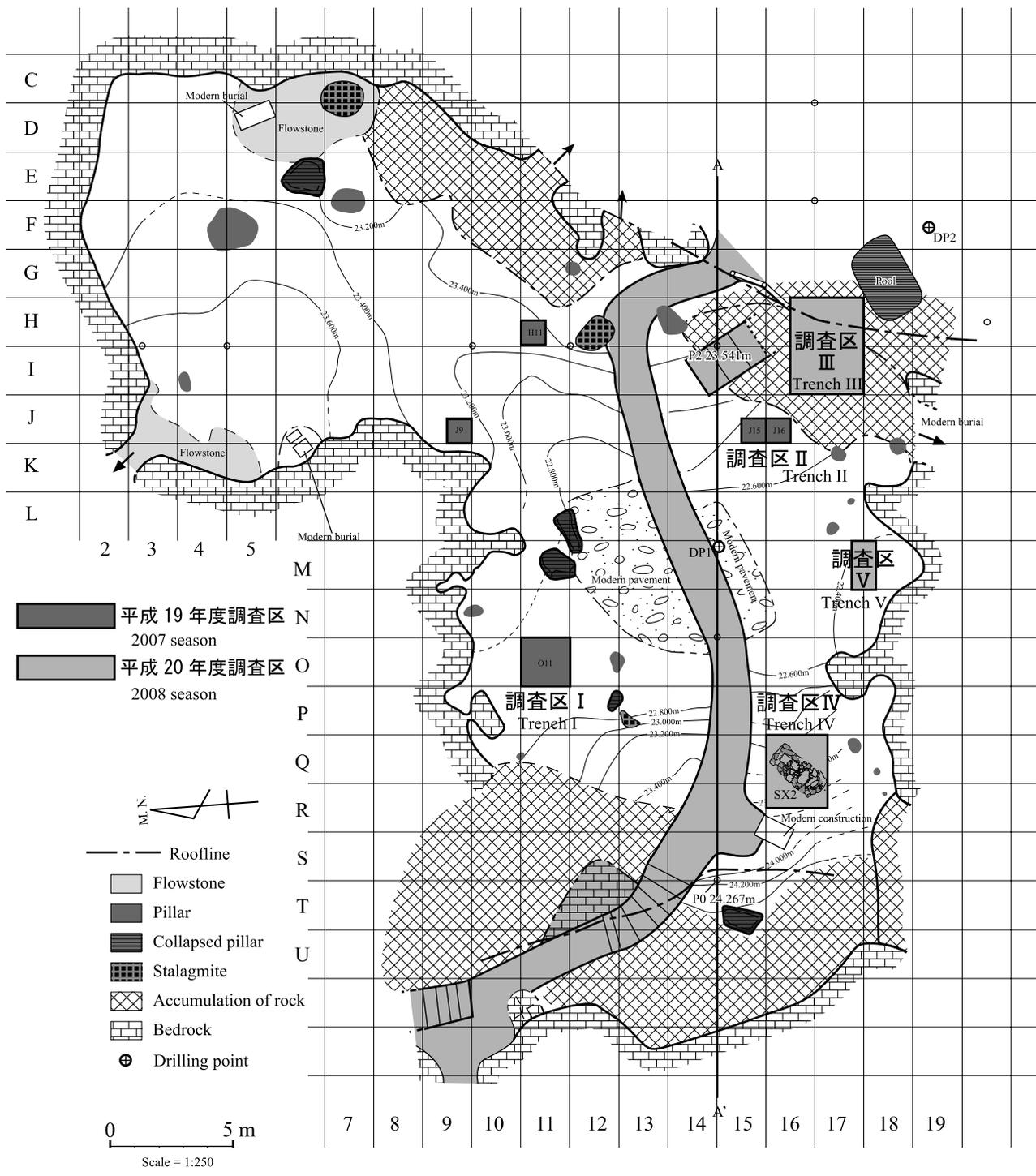
また、下記の方々には様々にご指導、ご助言を賜った。

新垣義夫、伊藤慎二、大城一成、大城秀子、大山盛弘、片桐千亜紀、岸本義彦、金城亀信、久高 健、小橋川 剛、崎原恒寿、島袋春美、島袋 洋、新里貴之、新里尚美、瀬戸哲也、高橋 巧、知念 勇、仲宗根 求、新田重清、盛本 勲、山村貴輝(順不同・敬称略)

このほか、多くの方々には調査に関わる様々なご支援、ご援助を賜った。関係各位に篤く御礼申し上げます。

今回の武芸洞調査にあたっては、東西の開口部を見とおすように任意に基準線を設定し、この基準線に平行、直交する形で2m×2mのグリッドを設定した(第1図)。グリッドによって区画される各マス目には、アルファベットとアラビア数字の組み合わせからなる区名を付している。遺物の取り上げや測量は、原則としてこのグリッドに基づいて行った。なお、今回示す測量図中の北は磁北(Magnetic North)である。

上記のように、武芸洞の調査は平成19、20年の2カ年にわたって、沖縄県立博物館・美術館と沖縄更新世遺跡調査団が共同で実施した。平成19年度には調査区、およびJ9、H11区の試掘を実施し、平成20年度には調査区～の発掘調査および洞内外の2カ所での地質調査(ボーリング)を実施した。



第 1 図 武芸洞地形図 (縮尺1/250)
 Map of Bugeido Cave site

3 平成19年度の調査 (第1次調査)

平成19年11月14日(月)～18日(日)まで実施した。調査面積は約8㎡である。また、11月18日には現地見学会を開催し、南城市、八重瀬町の小中学生を中心に約150名の参加があった。

調査区Ⅰ

○11区にあたる。表土から人骨を含む若干の遺物が採集されたが、表土以下はオカガニの爪やマイマイ等を含む無遺物のシルト層となる。このシルト層中には、ところどころに細砂の葉理が認められ、この堆積物が水流によって運ばれたものである可能性が推測された。調査区Ⅰでは、シルト層を約1.5m掘り下げた時点で発掘を中止した。

調査区Ⅱ

J15、J16区にまたがって設定した1m×2mの調査区である。表土中より少量の人骨、土器片とともに多量のイノシシ骨が出土した。イノシシ骨の中には、火を受けたものも含まれる。土器片はすべて小破片であるが、爪形文土器や無文土器(第3図1・2)、室川下層式?(同図3)、面縄前庭式(同図4)などがみられる。表土以下は調査区Ⅱ同様無遺物のシルト層となっており、地表下3.5mまで掘削したが岩盤には至らなかった。断面の観察では、表土直下のシルト層は下部にむかって漸次粘土に移行する様子が観察された。

J9、H11区の調査

表土中より人骨、獣骨、土器細片等が検出された。表土直下でシルト層にあたり、掘削を停止した。

4 平成20年度の調査 (第2次調査)

平成20年11月17日(月)～12月4日(木)まで実施した。調査面積は約22㎡である。11月29、30日には現地見学会を開催し、南城市、八重瀬町の小中学生を中心に、約400名の参加があった。また、平成20年度は、発掘調査と並行して洞内1ヵ所と洞外1ヵ所の計2ヵ所において、ボーリングによる地質調査を実施した(DP1, DP2)。ボーリング調査の成果については別途報告することとし、以下では発掘調査の成果について記載する。

調査区Ⅲ

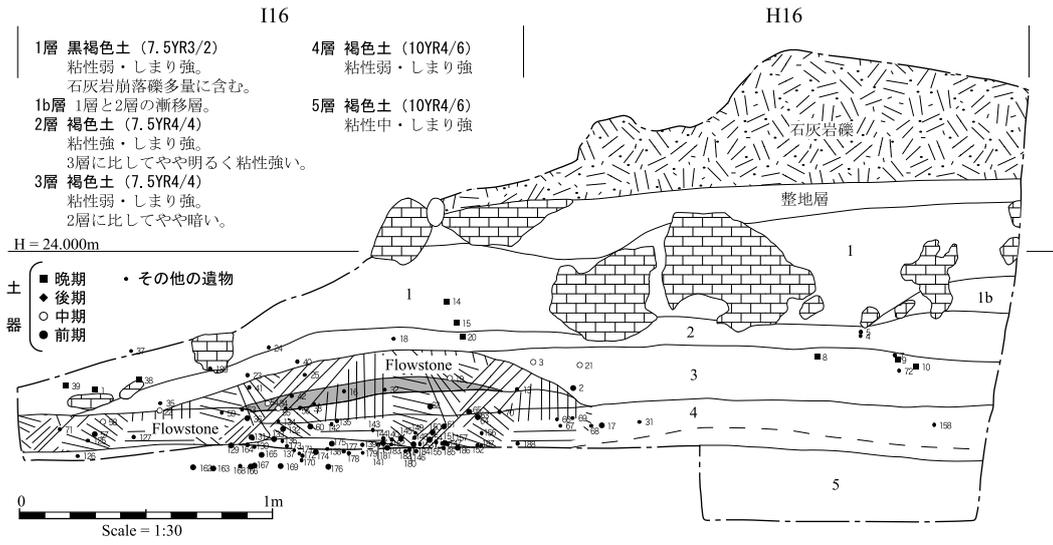
東側開口部のH16、17、I16、17区にまたがって設定した4m×3mの調査区である。洞外から洞内へ堆積物が流れ込んだ斜面部にあっており、セクション図(第2図)に示すように、堆積は洞穴外側で厚く内側では薄い。調査区の大部分は岩底ラインより内側にかかる。調査前、この地点には洞口を区画する木柵列が存在し、地表面には洞外から寄せ集められた状態で、大小の石灰岩礫が集積されていた。作業はこれらを撤去することから開始した。今回は、地表下1.5mまで掘削し、1～5層まで5枚の堆積層を識別した。

1層は黒褐色土で、大小の石灰岩礫が大量に含まれ、発掘には多大の困難を来した。遺物は少ないが、陶磁器やガラス製の薬瓶、金属片などが出土した。また、H17区南壁にかかる形で1体分の人骨が検出されている。この人骨は、石灰岩礫の隙間に落ち込んだような形で頭位を南西に向け、仰向けに四肢を屈した状態で検出された。なお、断面図中、層名を付していないが、1層上面を覆う形で整地層が認められた。関係者の話によると、これはおきなわワールドの開発に伴う整地層とのことであった。

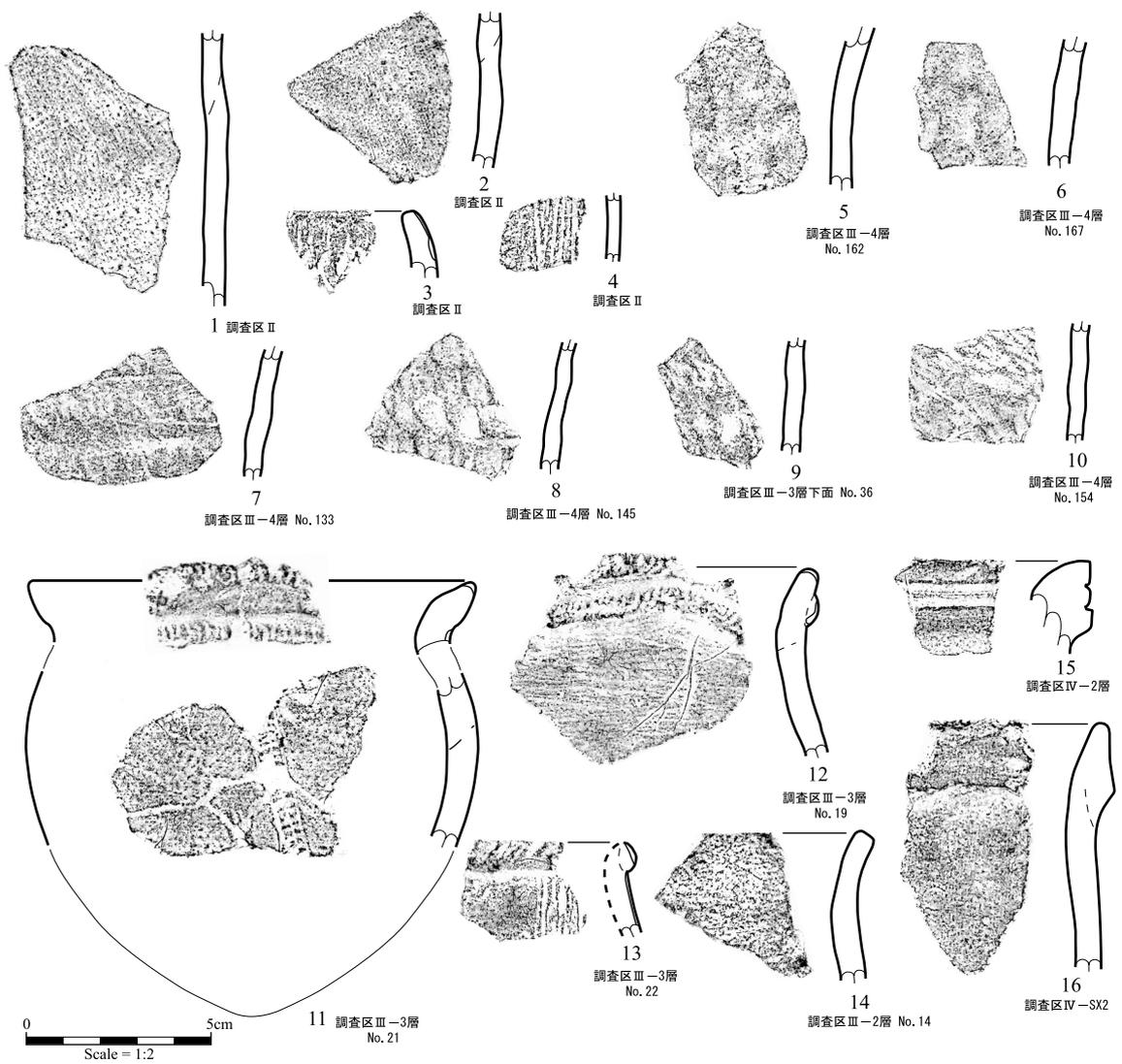
2層は褐色土で、縄文晩期頃の土器(第3図14)をごく少量含む。2層上面～上部にかけて、全身の各部位にわたる人骨群が、いくつかのまとまりをもって検出されたため、これをSX1とした。SX1は、いわゆる崖葬墓的性格をもつものと考えている。なお、SX1の人骨には焼骨は含まれていないが、2層中からは散乱状態で焼けた人骨片が少量出土している。

3層は褐色土で、シジミやマガキガイ等の破砕貝や焼けた獣骨片が多数出土した。貝類の出土量は約1.4kgを量る。3層中からは各種の土器が出土するが、上部では縄文後期、晩期の土器が多く、大山式と見られる押引文土器も見られた。中、下部では中期(面縄前庭式)の土器が多く出土している。調査区Ⅲ南半では3層中より石敷きを有する炉址1基および焼土面が検出されたため、それ以下の掘削は行っていない。石敷炉直上からは面縄前庭式の破片(第3図11)がややまとまって出土している。

3層以下の調査を実施した調査区Ⅲ北半では、3層下部から4層上部にかけて拳大の石灰岩礫が多数検出された。当初、この礫の集中について人為的な



第2図 調査区 北壁セクション (縮尺1/30)
North wall of Trench III showing points of findings



第3図 武芸洞出土土器 (縮尺1/2)
Potsherds from Bugeido Cave

遺構の可能性を考慮したが、調査範囲が限られていたこともあり、明確に遺構と判断することはできなかった。礫には黒化したものも含まれており、火を受けた可能性が疑われる。この礫集中部周辺からの出土遺物は少ない。

4層は褐色土で、特に岩底ラインより内側ではイノシシ幼獣骨を中心に、多量の遺物が密集した状態で検出された。今回は5㎡ほどを調査したに過ぎないが、獣骨の出土量は小破片まで含めると300点を越えている。これらの獣骨とともに縄文前期の爪形文土器（第3図5～8、10）が100片ほど出土している。土器片はほとんどが胴部の小破片であり、器壁は薄く脆弱で、取り上げ時に破損したものも多かった。貝類としてはカワニナ、カンギク、アマオブネなどが見られ、3層出土の貝類とは貝種構成に差異が認められる。このほか刃部磨製石斧、砥石、剥片石器等も見られた。遺物の出土状況等から見て、平成19年度調査区 の表土は、この4層に相当する可能性が高い。多量の遺物が出土したため、今回は調査区 北半の限られた範囲内においても4層を完掘するには至らなかったが、H16区北壁に沿って設定したサブトレンチ内では4層下に褐色土が認められ、これを5層とした。現在のところ、5層からは遺物は出土していない。

調査区IV

Q16、17、R16、17区にまたがって設定した3m×2.4mの調査区である。この調査区では、当初Q16区北東部の1m×1mの範囲を掘削した際、西壁のセクションに炉址がかかっていたため、その広がりを調査するために調査区を拡張したところ、大型の石材が露出した。この石材を取り外すと、思いがけずその直下から第1号人骨の頭蓋骨が検出された。結果的に、この石材は石棺墓の標石と蓋石であったのだが、その後、周囲を精査し、石棺墓（SX2）の検出に至ったものである。

石棺墓（SX2：第4図）は表土直下で検出されており、一部の石材は地表に露出していた。長さ約240cm、幅約115cmをはかる。石棺墓を構成する石材はすべて石灰岩で、周辺の転石を利用したものである。現在のところ、石材に人為的な加工の痕跡は認められない。なお、後述するように石材の一

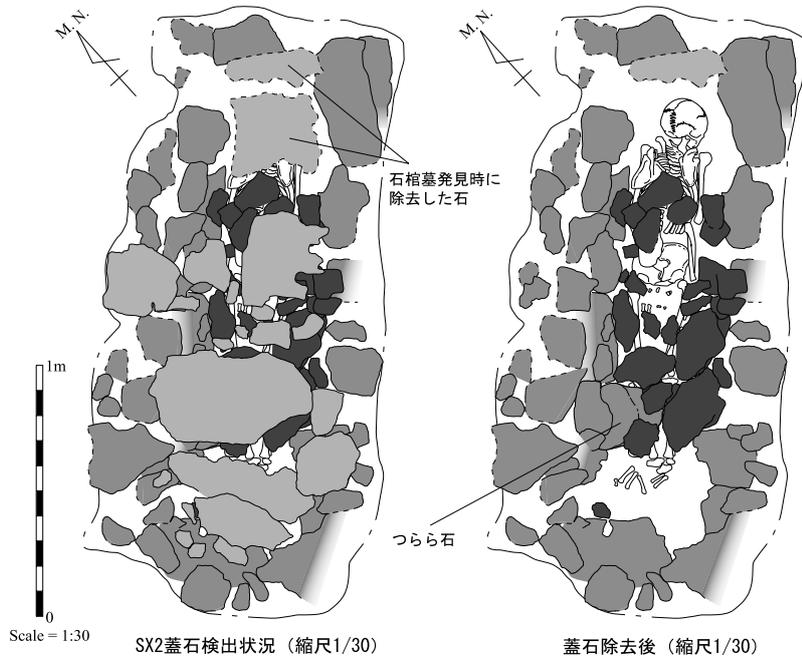
部には天井から落下したつらら石も含まれていた。

石棺上部には、扁平な石灰岩礫を利用した蓋石が存在したが、石棺の東西壁をきちんと渡る大型の石材は少ない。実質的には、石棺内を礫と土で埋め戻した後、棺体上面を平石によって封じたものである。ただし、石棺南端部は、蓋石の下に礫がほとんど存在せず、発掘時も蓋石の下に空隙が存在していたことから、この部分については完全には埋め戻されずに、直接平石によって蓋がなされていた可能性がある。蓋石は表土下数cmで検出されているが、石棺の南半部では蓋石の上にも石灰岩礫が積み上げられており、一部は地表面に露出していた。この礫は標石の役割を果たしていたものと推測される。

蓋石下の石棺内部は、しまりのない乾燥した粉末状の土壌で充満しており、埋土は刷毛で容易に除去することができた。埋土中には大小の石灰岩礫、マイマイ殻が大量に含まれていたほか、ウニの棘が多数検出されており、遺体の被覆に海砂が利用されていた可能性も考慮される。

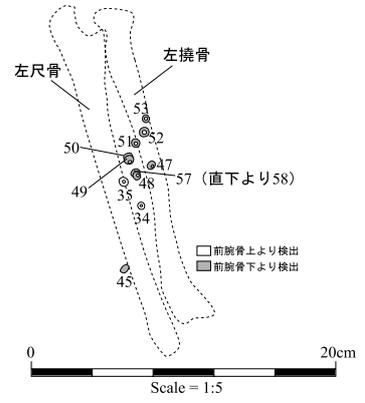
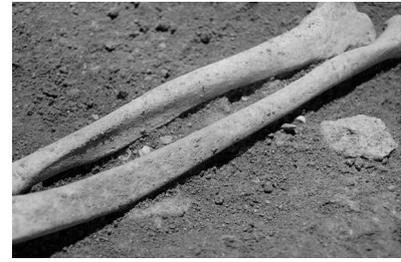
石棺内からは埋葬状態を留めた第1号人骨のほか、微量の土器片とともに、全身の各部位にわたるヒトの遊離骨が検出されている。これらの遊離骨は、石棺蓋石上からも散乱状態で検出されており、第1号人骨埋葬以前に、石棺内に埋葬されていた人骨に帰属する可能性がある。石棺内から出土した土器はごく少量で、小破片ばかりであるが、宇佐浜式～仲原式頃のもの（第3図16）が見られることから、石棺墓の帰属時期は縄文晩期と推定される。なお、石棺墓周囲からは室川式（第3図15）と見られる破片も出土している。

平成20年度の石棺墓の調査は、第1号人骨の取り上げを完了した段階で終了し、埋め戻しを行った。しかし、石棺墓自体の底面は第1号人骨がのる面よりもさらに深いことがQ16区北東部のトレンチ部分の観察から判明している。また、検出面での観察からは棺体外側に掘り方を有するようであるが、石棺下部および棺体そのものの調査は、平成21年度以降に実施する予定である。したがって、今回提示する石棺墓の図面および考察は、現時点での速報的なものであることをお断りしておきたい。最終的な図面、考察は本報告において提示する予定である。

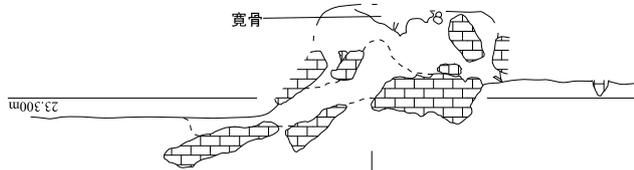


SX2蓋石検出状況 (縮尺1/30)

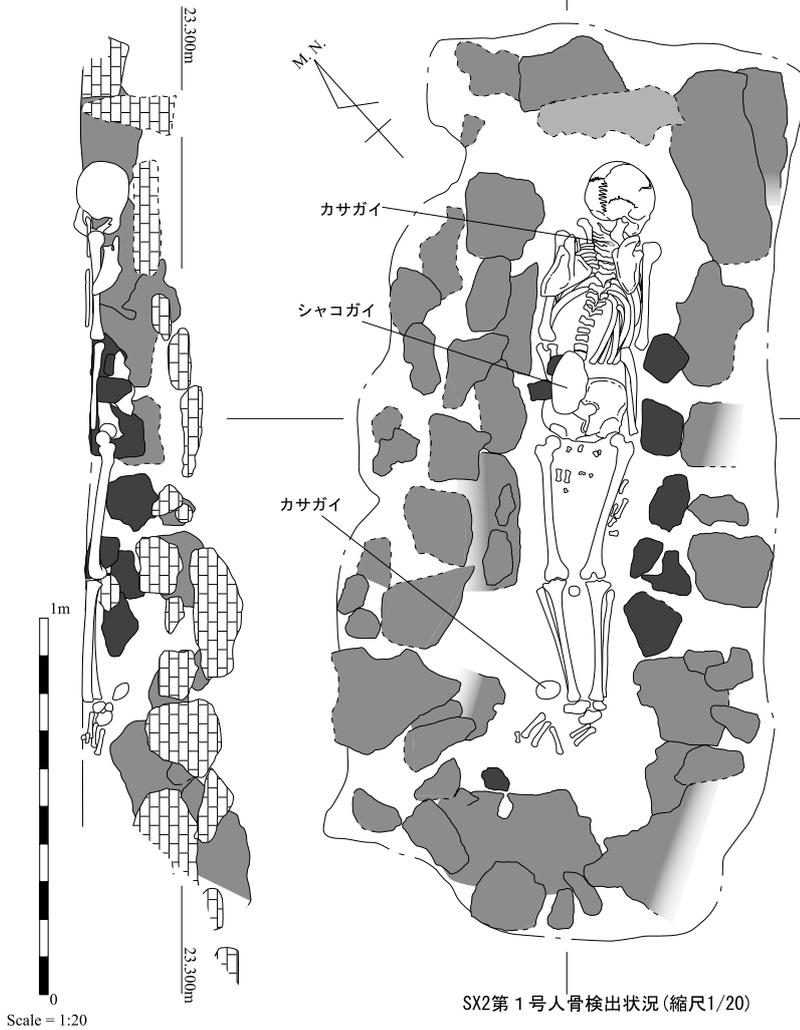
蓋石除去後 (縮尺1/30)



第1号人骨左前腕部貝珠検出状況 (縮尺1/5)



頸椎下カサガイ検出状況 (矢印部分)



SX2第1号人骨検出状況 (縮尺1/20)



第4図 調査区 - SX2 (石棺墓)
Trench IV SX2 (Pebble coffin)

調査区IV石棺墓（SX2）出土の人骨

石棺内からは埋葬状態を留めた第1号人骨とともに、覆土中より第1号人骨とは別個体に属する多数の遊離骨が検出されている。以下では主に第1号人骨の状況について記載する。

第1号人骨は、頭位を北東に向けた伏臥伸展の状態で見出され、顔面部はやや右を向いていた。全身の骨格が遺存しており、埋葬後に骨格が大きく乱された様子はない。ただし、手足の指骨はやや乱れた状態で見出されている。人骨の身体的特徴については、現在形態的分析を進めているところであるが、小柄な成人男性と考えられる。

第1号人骨に伴う遺物としては、左前腕部より直径4mm程度の貝珠が12個検出されており、腕輪として装着されていたと考えられる。また、頸椎下より殻頂部を打ち欠いた小型のカサガイが検出された。このカサガイは床面に置かれた状態ではなく、斜めに傾いた状態で検出されており、出土状況から着用品の可能性はある。

着用品以外の供献品としては、腰部に置かれたシャコガイおよび左足付近に置かれたカサガイがある。カサガイは、頸部から出土したカサガイと同様、殻頂部を打ち欠いたもので、殻頂側を下にして置かれていた。これらの供献品は、いずれも直接人骨に接してはならず、やや浮いた状態で検出されている。

このほか、特記すべき事項として、左の脛骨、腓骨の上に置かれたつらら石がある。このつらら石は、天井から落下したつらら石を転用したものとみられ、脛骨、腓骨との間には土が介在していた。

調査区IV石棺墓（SX2）における第1号人骨埋葬過程の復元

以下では、今回の調査所見に推測を交えながら、暫定的に石棺墓（SX2）における第1号人骨の埋葬過程を復元してみたい。

A 遺体を棺内に安置する

石棺床面上に伏臥の状態で見出された遺体を安置する。頭部付近の床面は他よりもやや低くなっていたらしく、頭部を安置するためにあらかじめ床面が整えられた可能性がある

B1 遺体と石棺東壁石列との隙間に礫を詰める

礫には床面から浮いた状態のものも見られるので、遺体を土で覆う作業と並行して行われた可能性もある。

B2 うすく土をかぶせる

腰部のシャコガイを支える礫の下にも、うすく土が介在していることから見て、遺体が見えなくなる程度まで土（海砂？）を被せたものと考えられる。

C1 左足の上につらら石を置く

つらら石と脛骨、腓骨の間には薄く土が介在していたので、つらら石は遺体が土で覆われた後に置かれたものと考えられる。埋葬後、壁体として利用されていたつらら石が偶然ずれ落ちた可能性も考慮されるが、つらら石上部の礫および蓋石が乱れていないこと、左の脛骨、腓骨の位置が乱れていないこと、カサガイがつらら石に接して置かれていること等から考えて、意図的に置かれたものと判断した。下肢部分を礫で覆う作業と並行して行われたのであろう。

C2 シャコガイを供献する

シャコガイを安定させるための支えとして、小さな石灰岩礫が2個使用されていた。また人骨と礫の間にはうすく土が介在していた。

C3 カサガイを供献する

殻頂を打ち欠いたカサガイを供献する。位置関係から見て、つらら石設置後に供献されたのであろう。

D 礫と土で埋め戻す

棺体上面まで礫と土を入れて埋め戻す。

E 蓋石を置く

蓋石を置いて棺体を封じる。

F 標石を置く

蓋石の上に礫を積み上げ、標石とする。

上記のように、埋葬過程はA B C D E Fの順に進行したと考えられる。この復元は、現状における暫定的な所見であり、今後変化することもありうる。全体的な印象としては、かなり手間をかけて埋葬していることがうかがわれ、儀式的な手順を踏んだ葬送が行われたのであろう。また、石棺埋土中より第1号人骨とは別個体に属する遊離骨が多数出土していることから見て、第1号人骨埋葬以前

に、この石棺に別の人物が埋葬されていた可能性も否定できない。この問題については、来年度以降の調査において解明していきたい。

調査区V

調査区Ⅴでは表土直下に厚さ10cmほどのフローストーン (FS1) が発達していた。表土およびFS1よりイノシシ骨、人骨等が出土した。FS1を除去すると、シルト層となるが、25cm下にさらに厚さ3cmほどのフローストーン (FS2) が形成されていた。FS2を除去すると、再びシルト層となり、このシルト層中よりネズミの下顎骨1点が検出されている。調査区Ⅴは表土より70cm掘削した段階で、発掘を中止した。

5 小結

最後に今回の武芸洞発掘調査の意義について述べ、まとめとしたい。

沖縄県ではこれまでに読谷村渡具知木綿原 (當間・上原編 1978)、同渡慶次中川原 (仲宗根 1992)、同渡慶次大久保原、宜野湾市真志喜安座間原 (宜野湾市教育委員会 1990、1991)、同宇地泊兼久原 (宜野湾市教育委員会 2002) などの海浜遺跡で石棺墓の検出例が知られていたが、今回初めて洞穴内で石棺墓が確認された。また、初めて貝珠腕輪が装着された状態で発見された。なお、奄美諸島では徳之島伊仙町の面縄第1貝塚に洞穴内石棺墓の検出事例がある (伊仙町教育委員会 1985)。

今回、沖縄島南部としては初めて爪形文土器の包含層が確認された。これによって、沖縄島南部にも爪形文土器が分布していたことが確認されたと同時に、従来知られていた沿岸部だけでなく、内陸部にも爪形文期の遺跡が分布していたことが明らかとなった。

なお、今回は武芸洞発掘調査成果の事実記載を主眼としたため、他遺跡の事例との比較検討は今後の課題としたい。

さて、これまで述べたように今回の武芸洞の発掘では、沖縄県初となる洞穴内での石棺墓の確認をはじめ、極めて遺存状態の良い人骨や貝珠腕輪の装着状態を確認するなど、多くの重要な知見を得た。

調査の成果もさることながら、今回の調査地点で

ある武芸洞は、平成20年8月よりオープンしたガイドツアーコース「ガンガラーの谷」内に位置しており、関係スタッフの協力を得て、ツアー参加者に発掘調査の様子を間近に見てもらうことができた。参加者の反響はおおむね好評だったようである。さらに、平成20年11月29日 (土)、30日 (日) には、現地見学会を開催し、南城市、八重瀬町の小中学生を中心に、約400名の参加があった。

今回の発掘調査が、雄樋川流域の歴史を掘り起こすだけでなく、観光や教育普及にも一役買うことができたのは幸いである。その背景には、博物館だけでなく、地元の南城市、株式会社南都の三者の連携があったことは言うまでもない。今後ともこうした協力体制を維持・発展させていくことによって、調査研究成果の地域還元にも努めるとともに、さらなる波及効果を期待したい。

参考文献

- 伊仙町教育委員会 1985 『面縄貝塚群：第1貝塚・第2貝塚・第3貝塚・第4貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集
- 新里貴之 2008 「喜念・佐弁砂丘遺跡群トマチン遺跡発掘調査概要報告 - トマチン遺跡第1次～3次調査の概要」 『人類史研究』 Vol. 14 13 - 28頁 人類史研究会
- 宜野湾市教育委員会 1990 『じゃな：真志喜区画整理地区の宅地造成に係る発掘調査報告』図版編 宜野湾市文化財調査報告書第12集
- 宜野湾市教育委員会 1991 『じゃな：真志喜区画整理地区の宅地造成に係る発掘調査報告』本文編 宜野湾市文化財調査報告書第14集
- 宜野湾市教育委員会 2002 『宇地泊兼久原第一・第二・第三遺跡発掘調査記録：宇地泊第二地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査図録集』宜野湾市文化財保護資料第53集
- 當眞嗣一・上原 静 編 1978 『木綿原 沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書』読谷村文化財調査報告書第5集 読谷村教育委員会
- 仲宗根 求 1992 「沖縄県中頭郡読谷村字渡慶次中川原貝塚」 『日本考古学年報』 43 630 - 631頁 日本考古学協会



武芸洞西側開口部
(中央の作業している場所が調査区IV)



調査区Ⅲ作業風景 (東より)



調査区Ⅲ北壁セクション



調査区Ⅲ-2層S X1 検出状況 (西より)



調査区Ⅲ-3層炉址（東より）



調査区Ⅲ-4層遺物出土状況（西より）

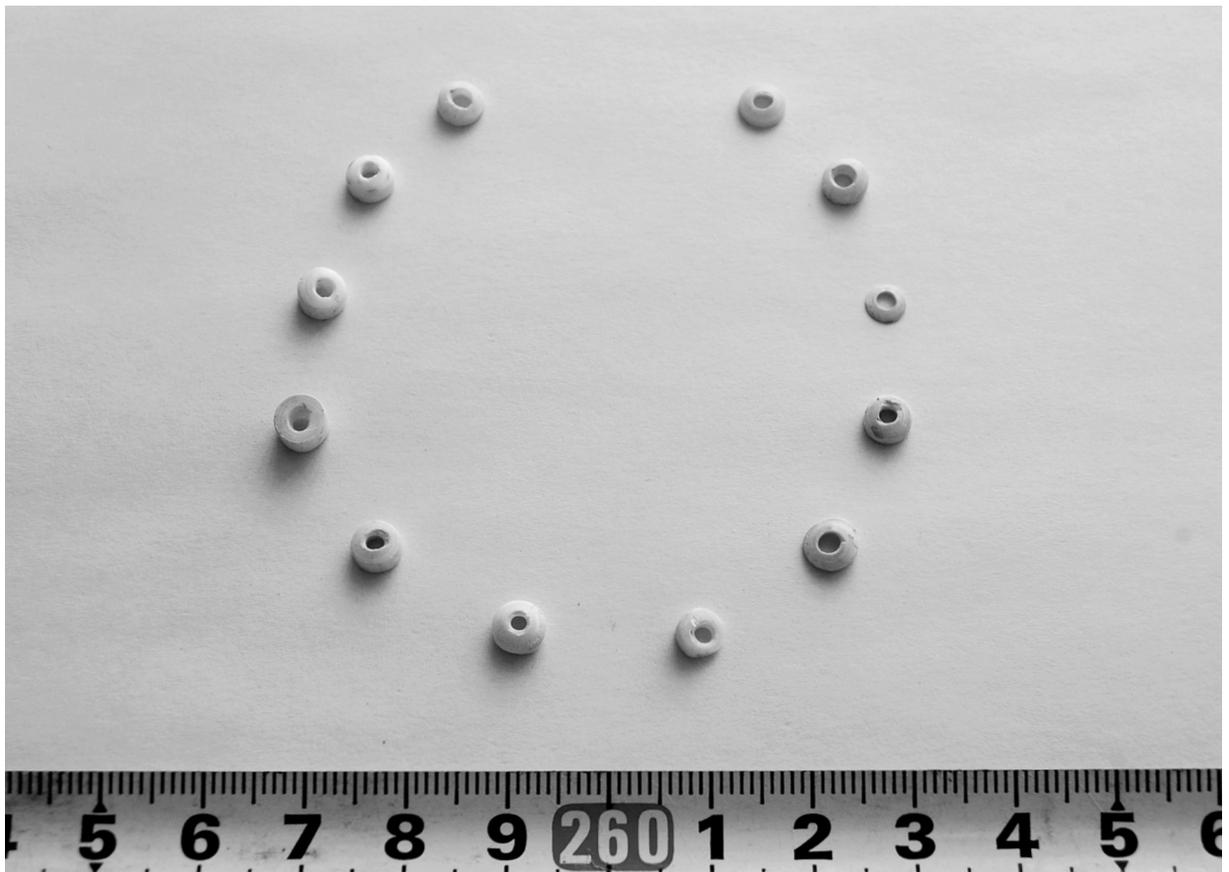


出土した土器の破片



石斧

(左2点は調査区Ⅲ-4層出土、右は表面採集品)



調査区IV-SX2 第1号人骨着装貝珠 (12個)



見学会の様子